The Japan Society for the Study of Education

モンテッソーリの教育思想に関する一考察
―― 幼児期から青年期までの全体的把握をめざして ――

早田 由美子
お茶の水女子大学大学院

従来のモンテッソーリ研究は、モンテッソーリの幼児教育思想を対象としてきたが、本発表では、特に日本で見逃されてきたモンテッソーリの学齢期の教育思想を中心に、幼児期と関連させて考察することにより、モンテッソーリ教育思想の全体的把握をめざす。資料は、モンテッソーリの未邦訳の著書"Dall'infanzia all'adolescenza"『児童から青年へ』、"L'autoeducazione nelle scuole elementari"『初等学校における自動教育』などを使用する。

モンテッソーリによると、児童期の子どもは、文化獲得の欲求をもつ。また、どちらかと言えば生物的存在であった幼児期に対し、児童期には、社会的存在へと変化し、より広範な社会とのかかわりの確立を必要とする。こういった子どもにとって、家庭や閉ざされた環境としての学校では、パーソナリティを十分に発展させていく要素が欠けるため、子どもを「開かれた世界に直面」させることによって、自己の力による世界把握へと導こうとする。

また、現実世界の個々の出来事は、「等しい要素の繰り返し」であり、「文化の実際的要約」ではあるが、それは、全体における位置づけ、宇宙における結びつきを再認識させてこそ、子どもの興味を深める。そこで、モンテッソーリは、現実の認識に基づいた「創造的想像力」を働かせて、「全体的認識」に至らせることを重視する。

さらに、青年期には、経済的独立という社会的自立への道を配慮し、科学や歴史の無限の学習の入口を開け、かつ、創造の欲求に答えることを提唱する。

このように、モンテッソーリの学齢期の思想を視野に入れることによって以下のことが明らかになる。

まず、幼児期には、「注意力の集中現象」→「正常化」により、秩序だった活動へ自己をコントロールできるという個の内部における「自立」がめざされたのに対し、児童期以降は、幼児期の個の確立を基礎として、社会的存在としての自立した個を準備していること。

次に、以上の目的遂行のための環境設定として、幼児期においては、子どもの印象を秩序づけ、実際の環境探究の基礎力をつけるため、かなりの人為的環境（教具）が「子どもの家」において配備されているのに対し、学齢期には、徐々に、現実世界と対面させることを通じ、世界の実際的把握、全体的認識の獲得によって、子どもの興味を満足させようとしていること。

さらに、モンテッソーリに対する従来の批判には、「個人を自己充足的な一種の実体として環境から切りはなし、歴史的社会的源泉から精神的活動を切り離す」（H. Wallon）「ありふれた経験の材料を使用しない」（J. Dewey）「想像力を軽視する」（W. H. Kilpatrick）なども存在するが、これらの批判は、モンテッソーリの思想の全体的把握によって、適切でないことが明らかになる。

NII-Electronic Library Service